

聞き得る心

眼と耳

眼の見えぬ哀れなる女、法席に出でて耳をそばだてて講演を聞き、見えぬ本尊に合掌して礼拝する。肉眼を失つて、心眼開け、心のうちに如来を見る目を開く。幸なる哉彼女。

十四歳の時間えなくなつた耳を有する哀れなる女、一席もかかさず講演に来て、力いっぱい黒板を見つめる。特別によんで、仮名を使い、絵をつかい、言葉つかいの口もと見せて、如来大悲の話をすれば、「わかります。わかります。」とて、泣き伏してしまふ。肉の耳を失つて心の耳を得たるか。

幸なる哉、彼の女。

おお、聞き得る心。

現代人

現代青年の前で「俗歌関の五本松」を歌う。彼らはこれを聞き得る。

現代処女の前で「美顔術の講習会」を開く。彼らはこれを聞き得る。

現代壮年の前で「一万円の貯蓄法」を語る。彼らはこれを聞き得る。

現代奥様の前で「最新流行の衣裳」を語る。彼らはこれを聞き得る。

彼らの前で宗教を語る。彼らの前に道を講義する。彼らの前に芸術を話す。彼らの何割が聞く耳を持つか。

此の足

この足が、田へも行く、山へもゆく。人を殺す時にもこの足がゆき、道を聞く時にもこの足がゆく。石川五右衛門の足は最後、油の煮えたぎる釜の中に立ち、親鸞の足からは衆生済度の草の紐が喰うて、仏の血が流れる。

あなたの足はいそいそと寺院の門をくくり、法席に出てゆく。

彼女の足は、劇場と活動写真館には行き得るが、聖席には動き得ぬ。

正何位勲何等何爵を有する代議士の足が妾邸の門をくぐらねば恥辱だという。現代教育を受けたる貧弱なる人生観に禍されて、聖席に出でて法を聞くのを恥辱だという。

噫。この足のふむところ、この足の至る世界。至細に反省して見ようではないか。

そもそも、あなたの母上は、あなたの足を撫でつつ、この足が尊き世界を歩みますようにと念願しつつ乳をのませてはくれなかつたか。

此の手

現代神士の手が、猟銃のひきかねにかかつて、美しい鳥が殺される。

盗人の手が雨戸をきつて、金庫の金をとるために使われる。

朝起きて先、この手が動く。夕寢床に入つてこの手が休む。その間に、幾千万度この事が働く。一体何事に使われたか。

印を一つおせば国家の政治の動く大臣の手。ハンドル一つ動かせば山のような汽船が自由に動く、船長の手。それらの手も尊い。ペンを一度とって流れ出づる思い出を書物にすれば、天下の思想を動かし得る大芸術家の手、絵の手を握れば、たちまち紙上に幽玄なる風景、神秘なる自然の妙趣を盛り得る書家の手、それももちろん尊い。

人のとり得る姿を手で表白し得る。

人の全ての姿を見た時に、最も尊い姿は合掌の姿である。罪濁の凡夫として久遠の仏心に生かされた身として、最も似つかわしい姿は合掌礼拝の姿である。

この掌が本年の前に合掌し得る。そうした手ほど尊いものが何処にあらう。

おそだて

彼女は涙をたたえて、雨の夜を僧院に語る。

「先生！」

亡き母が常に申しておりました。膝にもたれてお乳を吸う頃、母は、私の頭を撫でながら、「この足がみ仏様のみ法を聞くために、この手がみ仏様を合掌するように、この耳が仏法聴聞の御用にたつように、この目で仏様が拝めるように、そもそもこの子が、仏様を好きますよう」と念願しつつ育ててくれましたものを。

九州の和上様のもとで、「聞く耳」について聞いた時、私はまだ小さかった時の母の苦心を思いました。それはある時、私の耳の鼓膜が破れて、とても完全に全快が出来そうにない時、母は病院に私をつれて入院して、とうとう再び聞える耳にしてくれました。肉の耳を治してくれた肉身の親、その親を通して、生れぬ先からおそだての光とやら、こうした世界に出て聞かして頂く心に育てて下さった久遠劫来の親様の心を感謝せずにいられましょうか。」と。

聞き得る心

この事が動くのも心からである。この耳が聞くのも、この眼が見るのも心からである。心の眼が開かないならば、如何なる尊いものも猫に小判である。

感謝なさいませ。その足は光を求めて走り、その手は合掌礼拝に使われ、その耳は仏の道を聞くことに使われる。足と手と耳と口、それらの奥に心がある。

今のあなたのその法欲に動く心を単なる心だと思うのか。仏の道を求める心、それはそのまま仏から廻向の心である。久遠の如来心、そのものの活躍である。やがて如来を信ずる心は長時永劫の本願の働きであらねばならぬ。

「あら殊勝の超世の本願や、ありがたの弥陀如来の光明や。この光明の縁にあひたてまつらば、無始よりこのかたの無明業障のおそろしき病のなほるといふことは、さらにもてあるべからざるものなり。しかるにこの光明の縁にもよほされて、宿業の機ありて、他力の信心といふことをばいますでにえたり、これしかしながら、弥陀如来の御かたより、さづけましましたる信心とは、やがてあらはに知られたり。」(御文)